

# テレビ会議利用の外国語コミュニケーション教育

愛知県立大学外国語学部 堀田英夫  
hotta-hi@for.aichi-pu.ac.jp

## 1. 目的

遠く離れた地点間で映像と音声をオンラインで相互にやり取りするテレビ会議システムが、情報関連技術や通信インフラの発達により実用化され、外国語教育や異文化理解教育への利用が日本でも行われている。大学でスペイン語を学んでいる学生たちのスペイン語によるコミュニケーション能力を向上させ、学習動機を強めることを目的として、スペイン語圏大学の学生や教員との遠隔通信を組み入れたシラバスや授業方法を研究する<sup>1</sup>。

本発表では、2003年度にメキシコのプエブラ・ラスアメリカス大学と日本の愛知県立大学とを遠隔通信システムで結び映像、音声を含む双方向オンライン・コミュニケーションによって遠隔合同授業を行った経験から、遠隔通信システムをスペイン語教育へ応用することの有効性および問題点について、利用者側から見た技術面、運用面を中心に発表する。

## 2. 先行研究、試み

今までの実施や経験の報告をふまえ、テレビ会議利用による外国語教育を以下のように分類してみた。

通信技術	一地点	他地点	形式分類	先行実施・試行
テレビ電話	教師一人	生徒一人	個人授業	NOVA お茶の間留学
	生徒一人	生徒一人	ペアトーク	宮崎(2001)
テレビ会議システム	教師一人	複数生徒	一斉授業、講演	メディア教育開発センター(2002) De Benito y Juan Garau (2001)
	生徒一人	複数教師	口頭試問、弁論大会	
	複数生徒 + 教師一人	複数生徒 + 教師一人	合同授業	山内(1996:203-207)、早瀬(2002) 砂岡(2000)(TeleMeet の部分)
	複数生徒	複数生徒	グループ・トーク、ディベート	

## 3. 実施

ラスアメリカス大学には、テレビ会議専用のスタッフと部屋があり、メキシコ国内外とインターネット、インターネット2およびISDNのいずれかで結ぶことにより、講演会や口頭試問に実用化されている。装置としては、Polycom Viewstation FX(カメラとマイク付属)に、スピーカー付きのモニターを使っている。愛知県立大学側では、学内の学術文化交流センターの一室、小ホールに、ISDNを3本敷設し、Polycom Viewstation SP 384を設置した。映像と音声は、小ホールのビデオ・プロジェクターとスピーカーに流すこととした。予算が限られているため、当初インターネット回線による接続を検討したが、ファイアーウォールに穴を開けることになりセキュリティー上問題があること、大学から出ている回線が細いため学内情報システムに支障を来す恐れがあるとのことで、ISDN回線を利用することにした。

2003年10月7日午前9時(メキシコ時間10月6日午後7時)からメキシコ側のテレビ会議室技術スタッフであるウゴ・ロペス氏らの協力で、ISDN3回線による接続試験を行った。1回線で接続しての試験も実施し、映像の質は劣るものの、一応のコミュニケーションが可能であることを確認した。翌8日の同時刻に、学生を加えて第1回合同授業を実施した。筆者の観察では、こちらからの問いかけに対する先方の反応には、コミュニケーションに支障ないほどではあるが、実際の対話より一瞬の遅れがあるように感じた。

第一回合同授業での映像と音声について、愛知県立大学側参加学生にアンケートで尋ねたところ、「先方の映像について、お互いに話をするという目的から考えて」の部分での問いと「先方の声について、お互いに話をするという目的から考えて」の部分についての回答数を以下の表に示す。

先方の映像について、お互いに話をするという目的から考えて	総数 22名
------------------------------	--------

<sup>1</sup> 本研究は、科学研究費補助金「コミュニケーション重視の教育用標準スペイン語モデルの研究」(基盤研究(C)(2)、課題番号:15520365、研究代表者:堀田英夫、研究分担者:田中敬一、小池康弘、平成15,16年度)による研究成果の一部である。

1. 表情がはっきり見えた	11名
2. まあまあ見えた	11名
3. それほど良く見えなかった	0名
4. 表情までは見えなかった	0名

先方の声について、お互いに話をするという目的から考えて	総数 22名
1. はっきり声が聞こえた	9名
2. まあまあ聞こえた	12名
3. それほど良く聞こえなかった	1名
4. 何を言っているのか聞こえなかった	0名

自由記述欄での記述では、「表情が見えるので、見ていて普通に会話しているように思えた」、「映像と音声のズレがなく、リアルタイムに話せてよかった」、「意外に映像も音声もきれいだし、生で話しているような緊張感があった」、「想像以上に映像が鮮明だったので驚いた」などと書いていて、映像と音声の質について、5名が良かったという意見を書いている。2名は、映像について、「音声ははっきり聞こえたけれど、相手の表情が少し見にくかった」「メキシコの人たちの映像があまり動かなくて、最初は見にくかった。あと全体に画面が暗いような気もした」というように少し見にくかったと書いている。

以上から、愛知県立大学側での映像と音声の受信は、口頭コミュニケーションという点において問題ない質と考えられる。しかしながら、使用したビデオ・プロジェクターは1998年に設置された古い機器であるため、投影された映像を見るためにはスクリーン近くを暗くする必要があり、逆に、カメラに写るよう参加者は明るくしなければならないため、部屋の後ろ半分に着席させた。話し相手が映っているスクリーンから離れて学習言語で発話しなければならないという状況が学生達になんらかの心理的影響を与えたかもしれない<sup>2</sup>。

メキシコのプエブラと日本とでは、14時間（夏時間実施時）または15時間の時差がある。そのため、両方の授業時間内で合同授業を実施することはできない。日本側で朝9時から始めれば、先方では午後6時あるいは7時からとなる。メキシコの生活時間からすればこの時間は、午後の活動時間の終わりの方で、それほど問題がない時間である。2003年度は以下の時間に行った。

	日本時間	メキシコ時間
1回目	10月 8日午前9時	10月 7日午後7時
2回目	10月29日午前9時	10月28日午後6時
3回目	11月19日午前9時	11月18日午後6時

日本側学生は、愛知県立大学外国語学部スペイン学科の学生で、週に5回ほどのスペイン語の授業があり、スペイン人の先生との授業もある。メキシコ側の学生は、学部学科は様々で、日本人教師による日本語の授業の受講生である。それぞれ母語話者（ネイティブ・スピーカー）による授業を受けているので、テレビ会議によるコミュニケーションでは、一斉授業や講演の形式ではなく、学習言語を母語とする同世代の学生とのコミュニケーションを重視し、教師が立ち会うグループ・トークの形式とした。

メキシコ側は、約20人、日本側は、2年生の作文の授業の受講者を中心に約30人の参加を得た。

## 4. 授業とテレビ会議

### 4.1. 会話の目的

日常生活で我々は普通何らかの目的を果たすために言語を使用している。言葉を発することは、それによって何かの機能が果たされることになる。テレビ会議システムを利用してコミュニケーションをする目的として小冊子を作成することを学生達に課すこととした。参加者をグループに分け、メキシコ人学生とのコミュニケーションで得られた情報を盛り込んだ小冊子を学期末までにグループごとに仕上げることを課題にしたのである。4つのグループに分けたので、約5名のメキシコ人と約10名の日本人が一つのグループを形成し、小冊子には、合同授業で得られた情報を盛り込んで、各メンバーの紹介と、両大学の紹介、そしてグループで決めたテーマに関する文章を掲載することを提案した。

### 4.2. テレビ会議のための準備とまとめ

後期の約14回の授業で、3回の授業ごとに1回、計3回の遠隔授業を実施したので、遠隔授業の前の週

<sup>2</sup>このため2004年度後期には、モニターを設置して実施する予定である。

には、通常の作文の授業の他に遠隔授業のため日本側だけのグループメンバーによる話し合いを含む予習をさせ、次の週には、まとめをさせた。学生達は、合同授業で話すべき内容を前もって作文し、担当教員は前もって提出された文については、文法の間違いなどに限定し、できるだけ原文を尊重する形で添削した。

#### 4.3. 合同授業

1回目には、ラスアメリカス大学の日本語担当の為田義教先生との打ち合わせに従い、まずメキシコ側から参加メンバー各人が日本語で自己紹介をし、その後、日本側がグループごとに自己紹介をして次回以降話し合うテーマを決めた。音楽、食べ物、アニメ、祭(祭典)のテーマとなった。2回目以降は、グループごとに対面し、日本側が、各テーマに関して日本のことを説明し、メキシコについての質問をした。メキシコ側参加者は、これら質問に答えた。3回目には写真やアニメのイラストを示す他に、音楽のグループは日本の歌の録音を再生して聞かせ、食べ物のグループはおにぎりの実物を示した。

#### 4.4. 小冊子

3回目の合同授業終了後、学生達はそれぞれのグループで小冊子の作成にとりかかった。発話のために準備した原稿を編集し、すべてスペイン語で、まえがきとあとがき、それに目次をつけた。テーマに関する写真や、メンバーの自己紹介部分で各人の顔写真を載せたグループもある。提出されたものを発表者が *Temas de la cultura japonesa y la mexicana contemplados por estudiantes universitarios* (大学生の見た日本とメキシコの文化) とタイトルを付けて、4冊の小冊子を1冊に合わせて印刷製本した。スペイン語文章は、ワープロソフトのスペルチェックと文法チェックである程度の誤記は訂正したが、表現や文法には規範からの逸脱や理解不能の部分が多く含まれている。しかし学生達は、この文章を書いたり、編集したりするのに時間とエネルギーをかけており、その時点での到達点としてそのままにしてある。

### 5. 評価

#### 5.1. 観察

発表者の観察によれば、第1回の合同授業において、メキシコと日本両国の参加学生達は、相手側学生の発言に対し、*Sí*(はい、その通り)や *No*(いいえ)、それに拍手でもって十分な反応をしていた。ただ言葉のやりとりはあまりなかったため、両国間の学生の対話が成立するためには、言語形式の十分な準備が必要と判断した。

第2回目においては、日本側学生達は、準備してきたことを話すこと、あるいは読み上げることは出来たが、メキシコ側発話者の言っていることが、特にメキシコ特有の事柄についての語彙を聞き取ることに困難を感じているようだった。また聞き取ることができなかったことの説明を求めることもできなかった。メキシコ側は、日本側が言っていることで理解できない場合、最初は問い直してきていたが、日本側学生がその質問にもうまく答えられないことが多いため、だんだんに質問してくることはやめてしまったようである。

最後の回においてテレビ会議システムに慣れたためか、日本側学生の何人かはかなり自由に発話していた。その証拠の一つは、*¡Vale!*(その通り、賛成、よし)という表現を使っていることである。これはスペイン固有の表現で、スペイン人教師との授業で習得したものである。学生達にはメキシコでは使わないと言っていたのに使用したのは、意識せず比較的自由的な発話となったからと思われる。しかしながらその他の学生達は、発話をしたのではなく、書いて準備したものを読み上げただけで、それが他の参加者を退屈させてしまった。

#### 5.2. アンケート

第1回目の合同授業実施の一週間後に行ったアンケートでは、参加者中22名が回答し、その内、15名が自由記述欄にも記述しており、その全てがテレビ会議システムでメキシコ人学生と会話できたことが良い経験であり、次回も参加したいというような趣旨のことを書いている<sup>3</sup>。学生達には、太平洋を越えて初めて行ったりリアルタイムの音声と映像でのコミュニケーションが印象的であったようである。

ここでは、最終回実施の一週間後に行った別のアンケート結果を分析する。発表者担当クラスで、合同授業に一度でも参加しかつ発言して回答した学生14名の自由記述欄に書かれた文章を、31の文に分けて分類した。良い評価の10とスペイン語学習意欲がついたと思われる10は、当初の目的を達成していることを示している。しかし、実施方法が適切ではなかったと分類した21については、今後改善すべき点と考えられる。

	自由記述欄の文の数
楽しかった	4
ネイティブとの会話ができ良かった	2
顔を見ての会話良かった	2
準備協力(メール)に感謝している	1

<sup>3</sup> このアンケートの自由記述欄の文章は、堀田他(2004) p.430 に引用した。

異文化の接点を見いだせた	1
<i>良い評価</i>	小計 10
聞き取りが困難だった	3
改善して次回もやりたい	2
自分の勉強・準備不足だった	2
もっと練習・準備すべきだった	2
もっと質問すべきだった	1
<i>動機付けることができた</i>	小計 10
一方的だった	9
軽い話題の会話をしたかった	4
先方からの提案や質問など更なる発言が欲しかった	3
人数に問題あった	2
日本語会話もしたかった	2
テーマが問題だった	1
<i>実施方法が適切ではなかった</i>	小計 21

## 6. 結論

テレビ会議システムによって、リアルタイムの音声と映像による双方向でのコミュニケーションが可能である。学生達は、外国の学生と会話をする喜びを感じることができる。相手の言っていることを理解することや、思ったことを自由に発言することができないことや、仲間の中になんか自由に会話している者がいることで、言語学習への動機付けとなっている。これらの点で、今回の実施は目的を達成していると考えられる。

今回の実施で、参加者数、授業での準備とテーマ選定が外国語教育におけるテレビ会議システム利用には重要であることがわかった。両国の参加学生は、言語教育の教師ではないので、学生間の交流という意味では良いが、言語教育という面では、授業カリキュラムを十分に考えることが必要である。2004年度のためには、3年以上の学生により、特定テーマの授業による利用を考えている。具体的には発表者の言語研究演習（メキシコのスペイン語）と研究分担者のラテンアメリカ地域研究演習（ラテンアメリカの政治と外交）の履修学生によって、それぞれのテーマでの調査や意見交換のコミュニケーションの実施を計画している。

## 文献

- 砂岡和子(2000)「国際ネットワーク型語学学習プログラムの授業導入・早稲田大学 Chinese Online 実践報告」, (早稲田大学政経学部紀要『教養諸学』No.109)  
<http://www.waseda.ac.jp/projects/chinese/ksunaoka/col.dounyu.html> (2/10/2003)
- 匿名 (2001-4)「お茶の間留学・体験談」, 英会話 School じゃぱん,  
[http://www5a.biglobe.ne.jp/~vahoo/sc-nova\\_ochanoma.html](http://www5a.biglobe.ne.jp/~vahoo/sc-nova_ochanoma.html) (25/3/2004)
- 早瀬光秋 (2002)「ノースカロライナ大学と遠隔授業(1998年-2001年)を振り返って」, 外国語教育メディア学会中部支部第60回(2002年度秋季)支部研究大会,  
<http://www.dcs.or.jp/dcschool/program/h14/report/mieuncw.pdf> (24/3/2004)
- 堀田英夫、田中敬一、小池康弘、ミルナ・イグレシアス、ドミンゴ・メサ (2004)「研究ノート：コミュニケーション重視のスペイン語教育のための遠隔合同授業の試行」『愛知県立大学外国語学部紀要言語・文学編』第36号、421-433
- 宮崎里司(2001)「パソコン会議システムを利用した日本語教育の試み」, (『留学生教育』5, 91-107),  
<http://faculty.web.waseda.ac.jp/miyazaki/japanese/telm/ronbun01.htm> (2/10/2003)
- メディア教育開発センター(2002)「マレーシアとの国際遠隔日本語教育実験報告」,  
<http://www.nime.ac.jp/collabo/usm2002/index-j.html> (25/3/2004)
- 山内豊 (1966)『インターネットを活用した英語授業』, NTT 出版
- De Benito Crosetti, Barbara y Juan Garau, María (2001) "Patrones de interacción en clases de lengua extranjera a través de videoconferencia", EDUTEC'01 - V Congreso de Nuevas Tecnologías de la Información y de la Comunicación para la Educación "Congreso Internacional de Tecnología Educación y Desarrollo Sostenible". Murcia, 17-19 de IX de 2001.  
<http://www.edutec.es/edutec01/edutec/comunic/EXP45.html> (24/3/2004)